

建設コンサルタント海外奮闘記

～女性技術者の活躍～

国際委員会 **本多 信二** | HONDA Shinji

はじめに

今回から、今後建設コンサルタントとして海外業務に携わりたいと考えている方々に向け、海外業務に関わっている技術者がどのような課題を抱えながら頑張っているのか、海外業務の醍醐味は何かなどについて「奮闘記」と称してシリーズで紹介いたします。

第一回は女性技術者の立場から、建設コンサルタントとして海外業務を行う中での奮闘について、パシフィックコンサルタンツグループの4名に座談会形式で話していただきました。

自己紹介

清野聡子：パシフィックコンサルタンツ入社後、8年橋梁実施設計に従事後、海外業務を志望。現在外資民間案件で活躍。

永田佳世：ハシフィックコンサルタンツ入社後、国内
橋梁の新設・補修・耐震業務に8年間従事、現在鉄道
円借プロジェクトで施工監理シビルコーディネーター
として現地駐在で活躍。

高野千絵美 パデコ入社後、海外の広域物流計画や無償港湾案件、地方整備の包括的強化プロジェクトに従事後、現在東欧における鉄道円借プロジェクトに家族で赴任し、活躍。

鈴木はるか：パシフィックコンサルタンツ入社3年目。
南アジアにおける技術協力プロジェクト案件で業務
調整や技術検討で活躍。



海外業務の面白さ

高野: 思い通りにいかないところが面白い。定型でなく適応しながらやらないといけないところが唯一無二。特に東欧は途上国でなく、技術的には自分たちでできるため、従来の円借款事業とは異なる取り組みを求められている。

永田：やはり、思い通りいかないし、事業規模が大きいのが日本にはないところ。自分の意思決定がプロジェクトに反映される面白さもある。

鈴木:入社2～3年目でも検討成果を関係者へ説明してディスカッションでき、自分事として話せることにやりがいを感じる。日本のようにマニュアルなども整っていないところもあり、やってやったという達成感もある。

清野：以前、英国で港湾の設計に携わったことがあるが、日本と異なり地震が少ない英国では常時の検討が重要であった。また防波堤の設計では、英国では模型実験で必要十分な仕様を決定し、プロジェクトトータルで工事費を最適化するようにコンサルタントが導いており、衝撃的だった。また、国内業務と海外業務を比べてみると、海外業務の方が性別や年齢の壁は小さく、各担当が考えたことをしっかりと受け止めてもらえる傾向にあるように思う。

永田: フランクに本音で話してくれる。技術的にも信頼関係ができると、「永田がいいというならOK」と認めてくれる。また、フィリピンでは女性の働いている比率が高く、性別関係なくフラットな評価をしてくれる。

高野: 海外では現地政府からの期待度は高く、一技術者として見られるため、いい意味でのプレッシャーを感じる。また、海外の方が女性の活躍が目覚ましい。実際、現在のクライアントのトップは女性である。

清野：知らない土地に行けるのが楽しい。そもそも海

外の広さ・雄大さのわくわく感は、魅力的である。

高野：生活でも何が起こるか分からない面白味もある。

鈴木：風土・文化も違う。自分の悩みが小さく思える。

永田：仕事しながら成長できる。日本に帰れるという
楽しみというか、日本に対しての再発見がある。また、
長期休みもしっかり取れるのが良い。みんな対等に
休暇帰国するため定期的に休みがとれる。

鈴木：渡航のたびに強くなった気がする。

海外業務の苦勞と工夫

高野: 東欧などは自分のポジションを守ろうとするためにプロジェクト進捗が緩慢になりやすく、プロジェクトコントロールが大変である。

永田: 私が従事している国でも大統領、大臣が変わるとルールが変わることが多々発生するため、担当者レベルで物事が進まず、政治に左右されやすい。このため、スケジュールに関する意識が薄いことも多く、工程管理が大変。

鈴木: 渡航時に男性が多く、体力差があって付いて行けない。同じペースだと大変なので気にしすぎないことが重要と思っている一方、バイタリティの差にギャップを感じる。衛生上もかなり気になるが、慣れかもしれない。

永田：宗教上の制約や夜に一人で現場に行けない等がある。年上の女性がいらないため、自分で切り開かないといけないところもある。単身赴任なので、家族との折り合いの調整も必要な部分は日本と違う。

清野：現地事情以外では、アジア、ヨーロッパ、アメリカから参加する会議では、時差のため、夜中に会議対応せざるを得ない場合もある。家事や育児と並行しながらのやりくりに苦心する。業務については、焦っても仕方がないので、できることを頑張ることにしている。うまくできないところのバランスをいつも悩むが、割り切るようにし、日々を一生懸命やっている。

高野: 暗い夜道や現場を一人では歩けないので、買い物時間帯を気にする。時間に日々追われ全てこなされているとは思えないが、周りを巻き込んでやってきている。自分の状況をさらけ出し、状況をわかってもらうことを意識してやるようになった。海外では日本人コミュニティが狭いため、気を使うところもある。

永田: 海外は個人指名が多く、狭い世界なので、皆どこかのプロジェクトで一緒になるため覚えてもらえる機会も多い。女性だからと言われないように気は付

けている。

清野：生活・病院・買い物なんかも大変。

高野: 一時帰国時に薬を大量に購入したりしている。家族がけがした際に手術を渡航先か日本かで悩んだことがある。緊急帰国することにしたが、治療方法が真逆であり、渡航先での治療の妥当性が気になる。物価も高いのが悩み。また、プロとして一人の調査団と見られ、責任は重い。

鈴木：国内業務は3年だと短いと思われるかもしれないが、どれくらいまで学ぶべきものだろうか？

永田：8年国内でやって海外に出たのは良かったと思う。詳細設計における細かいチェックは日本しかない。これがいい経験になっている。技術的に叩き込んでもらっている。若い内なら1年でも2年でもいいと思う。

今後海外業務を考えている方へのアドバイス

永田：海外の方が仕事のには色々な経験ができるし、自分のやりがいを日々感じられる。一度飛び出してみるという。英語はたどたどしくても何とかなる。

高野: 日々帰りたいとは思いますが、「我々のために鉄道を造ってくれてありがとう」という話を聞くと、国際開発コンサルとして、その国の大型事業に携わっている誇りを感じられる。世界規模で見ることができるのが面白い。

鈴木: 海外業務の方が、「自分が楽しい」をつくりやすいと思う。自分次第で色々を見つけられる。働く環境も自分を変えやすい。

清野: 国内と違った楽しさ、社会貢献・国際貢献という面白味がある。違う風土や国が違うことによる新しい発見、プロセスの違い、単純にわくわくすることがある。海外業務はやって後悔する人はいないのではないと思う。迷ったら是非一歩踏み出してほしい。道は前に広がっている。

おわりに

国際委員会では、今年度も海外業務への新規参入を検討されている協会員の皆様にとって参考となるセミナー等を開催していく予定です。

皆様で、奮闘記で話してほしいことや、海外業務への新規参入にご興味または関連するご相談等がございましたら、国際委員会までお気軽にお問い合わせください。